

氏名(本籍)	木村勝彦(長崎県)				
学位の種類	博士(文学)				
学位記番号	博乙第849号				
学位授与年月日	平成5年3月25日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	哲学・思想研究科				
学位論文題目	カントの宗教思想 ——その批判哲学的構造——				
主査	筑波大学教授	Ph.D.	荒木	美智雄	
副査	筑波大学教授	文学博士	藤田	晋吾	
副査	筑波大学教授		水野	建雄	
副査	筑波大学教授	文学博士	川崎	信定	
副査	筑波大学教授		小澤	俊夫	
副査	筑波大学助教授		棚次	正和	

## 論 文 の 要 旨

本論文は、従来のカント研究においてしばしば看過されがちであった宗教思想が、カントの批判哲学にとって根源的かつ必然的な意義を有するものであることを、批判哲学の体系的な構造と展開とを考察することによって明らかにしようとしたものである。論文全体の構成は、序論に続いて本論を8章に分けて論述し、最後に結語を付している。

序論においては、形而上学および宗教哲学の問題を中心とするカント研究の変遷を概観し、その主要なものを吟味した上で本論文における論述の視点が大きく二つ述べられている。まず第一には、宗教の問題が形而上学の予備学として企図されたカントの理性批判の営みに深く根ざしており、それから切り離しては論じられ得ないということである。そして第二には、カントの宗教思想は道徳哲学の領域に解消されるべきものではなく、むしろ逆に理性批判によって画定された人間の限界が究極的に問われる局面こそ宗教なのであって、道徳の問題を通して露わとなる根源的有限性に関する自覚はここで主体的に深められ、徹底されるということである。さらにこれら二つの問題点を結びつけるものとして、「人間とは何か」という人間学的な問いがカントの思索を貫いていることを著者は指摘している。

このような視点に立って、本論の第1章から第4章までは、形而上学と理性批判との関わりという問題を、特に『純粹理性批判』の検討に基づいて論究している。まず第1章においては、形而上学の確立が前批判期から批判期にかけて一貫するカントの課題であったことを指摘した上で、批判

哲学の体系の中で形而上学がいかなるものとして構想されていたかを明らかにしている。そして、カントが「超感性的なもの」である神，世界，靈魂の三理念を形而上学の対象として考える一方で、同じく「超感性的なもの」であるはずの物自体については、それを形而上学の対象としては除外していることを明らかにした。この問題を承けて第2章では、批判哲学における物自体概念の体系的意義について考察している。まず、前批判期の諸著作を広く吟味することによって、物自体概念の起源が前批判期の統一的世界観および神観の内に求められることを指摘し、理性批判によって到達された知の立場たる超越論的観念論の内でもそうした当初の意味内容が保持されていることを明らかにした。そして、そのような物自体概念が超越論的観念論の前提でありながら、同時にその存立を脅かすものでもあるという両義性を孕んでいることを指摘した上で、そうした体系的困難にもかかわらずカントが物自体概念を放棄しないのは、それが「限界概念」として理性の限界、換言するならば「人間の立場」を画定することによって、逆に「超感性的なもの」の領域を積極的に示しており、カントの形而上学的構想の重要な前提となっているためであることを解明している。

第3章においては、超越論的観念論の内部における物自体概念の体系的困難を解決するために、カントが物自体概念をさまざまに言い換えていることに注目し、そうした言い換えの代表的な例である超越論的对象とヌーメノンの問題について考察している。そして、そのような言い換えが結局は挫折していること、しかしこうした挫折を経て物自体概念のもつ形而上学的な意義はより鮮明なものとなっていることを論証している。そして第4章では、思弁的理性の弁証性を摘発した「超越論的弁証論」の「超越論的理念の体系」の章に注目し、なぜ理性が神，世界，靈魂を形而上学の対象として求めざるを得ないのかについてのカントの根本的見解を読み解いている。そして、理論理性の領域と実践理性の領域とで一貫して三理念が問われることの体系的意義を究明している。

主として物自体概念をめぐるこのような考察の成果を承けて、本論文における論述は次に、カント哲学においては宗教の問題が道徳に解消されるべきものではないという点について展開される。しかしながら、カントの批判哲学は道徳における理念への実践的超出を主張するものであり、その中心問題は実践的自由である。したがってまず第5章においては、『純粋理性批判』の「超越論的弁証論」におけるアンティノミーの問題を手掛りにして物自体論から自由論への展開について考察し、物自体と現象との区別が人間の「性格」の規定として取り込まれることにより、カントの自由論はその起源において決定的な困難を内に含まざるを得なかったということを明らかにしている。そして第6章では、特に『道徳形而上学の基礎づけ』や『実践理性批判』の検討によって、実践的自由の概念を意志の自律という概念に厳密化しようとするカントの自由論の基本的構造を解明し、その問題点を論じている。すなわち、実践的自由が超越論的自由を根拠とし、人間規定の二重性を立論の前提としている以上、意志の完全な純粋性を要求する自律の概念にはそもそも困難が伴っており、カントの自由論はその究極的な立場である自律の思想において深刻な矛盾に直面せざるを得ないということを論証している。しかしながら、著者はこの点でさらに踏み込んで、そのようにカントの自由論の挫折に見えるものが実は人間の自由そのものの限界にほかならず、ここに人間理性の根源的有限性が露わとなっていることを指摘して、それが神聖性との断絶として自覚されるとき、すな

わち「人間の立場」での理念への実践的超出が断念されるとき、宗教への突破がなされると主張している。そしてそのことを示す重要な事例として、定言命法とは従来の解釈のように道徳法則と直ちに同一視されるべきではなく、神的な道徳法則の有限な人間に対する限定的表現として理解されるべきことを解き明かしている。

こうして第7章においては、道徳の領域における限界の自覚によって、人間理性は不可避免的に宗教に突破せざるを得ないということ、最高善の問題をめぐる考察する。すなわち、根源的最高善である神との無限の隔たりの自覚によって、神や靈魂の不死が要請されることになり、それが理性信仰と言われるものにはほかならないことを確認した上で、そうした理性信仰の内実を『単なる理性の限界内における宗教』を検討することによって解明している。そして自らの限界の自覚が根本悪として掘り下げられるとき、人間の有限性は最も深く受けとめられるのであって、理性の限界を見極めようとするカントの理性批判は必然的にそこに到達せざるを得ないということを主張する。それを承けて第8章ではさらに、人間の根源的な限界を自覚することで得られたカントの宗教的意識が、世間知や歴史観の内にも明確に反映しているということ、従来本格的に取り上げられることのほとんどなかった世間知の講義や歴史哲学の諸著作などを吟味することによって指摘する。そして、啓蒙の思想家として人間の進歩を確信するカントが、同時に他方でまた根源的限界の自覚のゆえにペシミスティックな人間観をもっていたことを明らかにして、人間の限界を見定め続けたカントには、単に啓蒙の思想家としてのみは捉えきれない宗教的な深みが認められることを主張している。

このような論述によって本論文は、宗教が決してカントの批判哲学にとっての異質物なのではなく、根源的かつ必然的な問題であるということ、むしろより積極的に批判哲学全体を宗教思想として読み解き得ることを主張する。そして結語においては、そうしたカント理解の転換がひいては、カントを範とする近代思想もしくは啓蒙そのものの根本的な再評価にも通じ得ることを指摘している。

## 審 査 の 要 旨

本論文はカントの哲学全体を宗教思想として統一的に読み解こうとするものであり、その視点は従来のカント研究史にはほとんどみられなかったものである。特に筆者は宗教の問題が形而上学の問題と不可欠であるという見通しのもとに、E・カッシーラー、H・ハイムゼート、G・マルティン、A・シュヴァイツァー、H・J・ペートン、G・ピヒトなど本研究に関する従来の主要な研究成果を着実に踏まえ、批判哲学の主要な著作および前批判期の諸著作を内在的かつ精密に考察している。そのみならず、従来ほとんど本格的に論じられることのなかった『人間学』『自然地理学』などの世間知に関する講義や歴史哲学に関する諸著作、さらには遺稿や書簡にも広く目を配ることによって、「人間とは何か」という問いがカント哲学全体を貫く導きの糸であることを明らかにし、それをカントの宗教思想と結びつけて統一的に理解している点は独自のものである。ともすれば従

来看過されがちであった宗教の問題を正面から捉えることにより、それがカントの批判哲学を産み出す原動力であり、かつまたその到達点であったことを明らかにすることで、本論文はカント哲学に関する理解に新たな局面を切り開いている。さらに、こうしたカント理解の転換が近代思想もしくは啓蒙そのものの再評価にもつながることを指摘することによって、研究のさらなる展開の可能性を示している。

しかし他面において、著者が宗教思想こそカントの批判哲学を産み出す原動力であるとする一方で、宗教思想を批判哲学の最終的かつ必然的な到達点であると述べる時、そこで問題となる宗教がまったく同じものであるのかどうか、異なるとすればいかなる点においてであるのかということについては、さらに深く立ち入って詳細に論述する必要があるだろう。またそれと関連して、カント自身についての伝記的な研究にも目を配り、文献学的により精緻な検討を要する部分もあり、これらは著者の今後の留意と研究に俟つところである。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体としてみれば著者の広範かつ精密なカント研究の成果は、関係学界に新風を吹き込み、貢献するところ大であると認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。